

新・農業経営者ルポ／第64回

# 人々の支えがあって 実現した新規就農、 でも……



右から鈴木美穂子、鈴木敏夫、そして研修生の菅野亜希。

## 人々の支えがあって実現した新規就農、でも……

非農家出身の新規就農者だから、農業・農村の変革者足りる。鈴木敏夫・美穂子夫妻は、自らを夫婦である前にパートナーであり同志なのだという。夫婦だから一緒にやっている農業ではない。多くの農家がそうであるように夫婦で傷をなめあうのではなく励ましあえる間柄。そんな二人であるから、今がある。

こんな言葉がある。

「農業を変えるのは、若者とよそ者と馬鹿者である」

筆者もその通りだと思う。それだけ、農業界そして農村にあるムラ意識がそれを妨害している。東京や千葉の都市部で体験農園を経営する人から聞いた話である。

「村内で勝手なことをするな」

練馬や松戸のような市街地ですら、その生活実態とは関係なく地域の農家を自認するおじいさんにはういわれことがあるそうだ。

今回紹介する鈴木敏夫（32歳）とその妻で、農業をともに取り組む美穂子（29歳）の新規就農10年の体験

は、農家として生まれて農業を職業として選んだ多くの読者にとつても農業を考える上で示唆に富るものではないかと思う。

### 漠然とした憧れから

鈴木敏夫・美穂子夫妻は、10年前に敏夫の実家のある埼玉県の児玉町（現本庄市児玉町児玉）で農業を始めた。

だ伸だ。

敏夫は大学校卒業後、農業の実践を学ぼうと、農業生産法人を持った野菜のカット会社に就職した。しかし、そこでは、単なる作業員として使われるだけで、農業の経営や技術を学ぶ場所ではないと思い、2カ月で辞めてしまう。

二人はともに、非農家の出身。敏夫の両親は夫婦揃って児玉町の役場に勤めてきたサラリーマン。美穂子も福島県と富山県出身のサラリーマンの娘である。美穂子は、両親や中

学校に行き、さらに埼玉県の農業大学校に進んだという人であるが、美穂子に言わせると、

「農業をやりたいというより、農業ブームといわれる今の若者の多くがそうであるように、なんとなく農業に憧れていたんです。それを社長（敏夫）に引っ張り込まれたのです」と笑う。

途上國の人役立ちたいと思っても、自分には何もない。まずは自分で農業を経営してみなければ……。それも、その場で調達できるものを使つての農業を学ぼうと思つた。敏夫が特別栽培レベルであつても除草剤や化学肥料に依存しない農業にこだわるのはそのためである。22歳のときだつた。

農地もなく、資金もない。農家として行政的に、そして地域の中で認められなければ農地すら手に入れられない。でも、行く先の農家はみな高齢化している。ここには、自分が必要とされる場が必ずあるはずだ。そこで何年間か実績を積み、土地を手に入れる交渉もしてみよう。もし外に行きたいという夢があつた。そのために英語を学ぼうと英語の専門学校に進学した。でも、それだけでは何の役にも立つことができない。

それで埼玉県の農業大学校に進学した。美穂子は農業大学校での敏夫の1学年後輩。ブロッコリーの栽培研究をテーマとする実習で一緒に学ん



**つぶつぶ農園・和菜**

# 鈴木敏夫・美穂子

埼玉県本庄市

すずき・としお●1977年、埼玉県本庄市（旧児玉町）生まれ。

みほこ●1980年、埼玉県戸田市生まれ。

夫婦揃って非農家出身。埼玉県の農業大学校を卒業後、敏夫の実家のある児玉町で就農。現在、60aのハウスと約6haの畑で野菜を生産し、生協を中止に販売している。同時に彼らは、これから農業を職業として選択していく人々のために、地域の農地を彼らの責任で借りていくことにも熱心である。

いに行くことから始めた。そして、

地域の農家に受け入れることに一所懸命だった。軽トラックを買い、

すれ違う人誰彼かまわず挨拶をした。でも、最初は挨拶を返してくれた人のほうが少なかった。やがて、敏夫を応援し、手助けしてくれる先輩農家に出会うようになつた。彼らの農場には彼の年齢よりも長く働いている75馬力のMFを含めて7台のトラクタがある。それらのほとんどは、高齢化の進んだ生産組織に手伝いに行つたことを契機に譲り受けたものだ。技術を教えてもらえるだけでも、敏夫たちが経営規模を拡大していくと、かつては、親切にしててくれる人々も増えてきた。

でも、敏夫たちが新規就農に協力して、親身になって新規就農に協力してくれる人々を含めて、微妙な反応の変化もあつた。地域内の優良な畑が耕作放棄される中で、県外の農業生産法人に借りられてしまう状況も出てきている。俊夫はそんな状況で、どうして狭い地域の中で競争をしなければならないのかと思うこともあるという。

敏夫が農家になるきっかけは、農協職員から埼玉県が勧めている「ルーキー農業塾」という新規就農応援する制度だった。制度を利用し、地域の耕作放棄地を借り、農協に出荷するのである。敏夫はそれに飛びつ

## 夫婦である以上に同志

いた。

一方、美穂子の場合は大学校在学中から敏夫に誘われて農業を始めていた。周囲は反対とはいわないが、大賛成というわけでもなかつた。ましてや、結婚もしないで敏夫の家に同居するという。両方の家族にも強い反対はなかつたようだが、親の思ひは複雑だつたのではないか。

それにもかかわらず、二人がそれを選んだのは、彼らの世俗を超えた素直さがあるからなのだろう。

敏夫が卒業して数カ月後、美穂子が大学校の2年目の夏に、敏夫に誘われて児玉町での二人の新規就農チヤレンジを始める。

二人に聞いてみた。敏夫が美穂子を誘ったのは「プロポーズだったのか?」と。すると、二人は異口同音にそうではないと言う。

敏夫はすでに会社を辞め、6月から農家見習いを始めていた。農家になるには地域に受け入れられなければならぬ。大学校の実習で、二人の中にある同じ波長を意識していたのかもしれない。敏夫は美穂子に大学校を休んで、農協の野菜育苗センターの手伝いに行けよと言つた。また、休みは休みで敏夫の作業を手伝つた。こう書くと、敏夫の支配力で

1



2



3



①③研修生の菅野は農業を職業として選ぼうと行政に相談にいった時、担当者から「農家の嫁になれば?」と言われて愕然とした体験を持つ。今、彼女はつぶつぶ農園の管理者の一人だ

②現在7台あるトラクタは地域の農家から譲り受けたものがほとんど。

# 人々の支えがあって実現した新規就農、でも……



4 5彼らが借り受けた農地は耕作放棄された場所がほとんど。だから、雑草には悩まされる。しかし、除草剤を使わない彼らの栽培にあえて取り組んでいる。その経営のやり方を応援してくれる地主もいる。6ミズナと並んでナスも主力商品のひとつ。

美穂子を振り回しているこのごとく聞こえるかもしれないが、それは違う。男と女の好き嫌いなどという前に、同じ農業に生きる道を見つけ出るとしている二人が、それが農家になるための研修だと思つただけだ。農業をやりたい二人の都合が一致したのだ。一人でやるより二人でやるほうが地元の手伝いがよくできる。婚姻届を出したのはその3~4年後だ。彼らは夫婦である前にパートナーであり同志なのである。夫婦だから一緒にやっている農業ではない。そんな二人や敏夫の両親を中傷する人もかつてはいた。でも、多くの農家がそうであるように夫婦で傷をなめあうのではなく励ましあえる間柄。そんな二人であるからこそ今があるのだろう。

保育園から戻ってきた二人の長男・啓太（6歳）は、筆者の取材中も畑や作業場で遊んでいる。農家の子供が農業や畑には見向きもしないというケースはよくあるが、非農家出身の二人であればこそ、啓太は農家の子供として育つのではないだろうか。

## つぶつぶ（粒粒）農園・和菜

美穂子は敏夫を「社長」と呼び、敏夫は美穂子を「美穂子さん」と呼びかける。さらに、同農場の研修生

である菅野亜希（28歳）も立場は研修生であるが、一人にとつては同志である。彼ら以外に、敏夫の両親・伊佐男（56歳）と文子（57歳）も役場を早期退職して彼らを手伝つている。最初は敏夫を中心になつてやつて、農地を借りる交渉も、父親に任せているという。農家ではないが、長く同地にすむ年配者の伊佐男のほうが話が進みやすいからだ。

菅野は、シルバー人材センターから紹介されてきた人数名、それに研修生としてきた人々に作業指示を与える立場にいる。菅野は埼玉県蓮田市の出身でつぶつぶ農園に来て4年目になる。これまでも沢山の人々が彼らのところに農業をやりたいと言って訪ねてきたが、残つているのは彼女だけだ。

敏夫たちは菅野が話していた体験に共感したという。

菅野が農業をやりたいと行政に相談に行つたら、担当者から「農家の嫁になれば?」と言われた。その新規就農者に対する無理解あるいは、暮らし方としての農業しかないと思つてゐる農家や農業関係者しかいなかつたのが悔しかった。彼らが、職業として農業を選ぼうとしていることを理解していないからで、それは新規就農者だけでなく多くの農業経営者たちが背負つてゐる時代の制約と

同じものなのではないか。考えてみれば今時、職業の選択が婚姻関係に縛られているのは、歌舞伎と農業くらいのものではないだろうか。そして、それが農業や農村を衰退させる原因のひとつになっているのだから馬鹿馬鹿しい。

「つぶつぶ農園・和菜」という屋号もそんな思いも反映している。その命名は美穂子のアイデア。美穂子が穀粒食にこだわるマクロビオティックの本を読んでいたこともあり、粒（つぶ）や地元野菜にこだわる農業をと考えた。さらに、個人個人がしつかりしていこうという意味でも「つぶつぶ」なのだ。和菜は日本の野菜という意味。美穂子が営業し、俊夫が現場そして全体を見通す。まだ、法人化はしていないが、農場の営業窓口としてのつぶつぶ農園の代表は美穂子だ。俊夫は、自分が地域に根ざす活動をしなければ、と思っている。困った人を手伝う。そこでこそ、新規就農者としての自分たちが地域に認められると考えるからだ。

## 次代のために農地を確保

敏夫は数年前、ついに借りてるハウス団地の土地の一部50aを貰つた。地権者に頼まれてのことだった。資金のない彼らには大きな投資であ

つたが、長期的には借地を広げていくことにするとしても、それは地域の納得を得るために必要なことだと考えた。

現在の経営耕地は施設が60a、畑が約6haである。最初の数年はせいぜい1ha程度の畑を借りて経営をしていたが、今は積極的に農地を借りるようにしている。それは、経営としての売上確保のためというより、自分たちが農地を確保して、次に来る者、そして地域の農業を守るために必要だと考えるからだ。

農家の高齢化は進んでいる。そうした農家の農地は耕作放棄されてしまう。それを見越して、冬の間だけそのままの土地を県外から借りに来る農業生産法人も多い。彼らは農地を使いまわすだけで、作期が終わればそれでおしまい。だから土作りに力を入れない。新規就農者であれ、農業を職業として選択し、地域でこそ農業を発展させようという者がいるのに、地元農家たちがそんな借り手に借地の条件がよいからといって農地を提供してしまう。それでよいのだろうか。



8



7



9

【7】除草のためにとヤギを飼い始めたが、うまくいかなかった【8】放棄されていたハウス団地を借り、その一部の農地を購入した。資金の無い彼らにとってはその農地購入は大きな投資だったが、それによって地域に農家として認められた【9】まだ、技術は未熟である。でも、農文協の農業技術体系を読み込むなど、勉強は熱心だ。

# 人々の支えがあって実現した新規就農、でも……



12



10

10 11 12 「敏夫・美穂子夫妻は、自らを夫婦である前に同志です」という。しかし、「社長」、「美穂子さん」と呼び合う二人の姿は、農家とその嫁ではなく、同じ職業を選び、同じ事業そして夢を作り上げていくパートナーとして強く結びついているようだ。

敏夫は除草剤を使わない。また、耕作放棄地となつた農地を借りることが多いために草に苦しめられ、事実、敏夫らの農地には草も多い。でも、そんな事情を察して、となりの農家に事情を説明し、自ら境界地の草刈りをしてくれる地主もいる。

彼らは高齢化で農業ができなくなつて、あればこそ、自分がその手助けをしなければならないのだと考えているのだ。

## 新規就農者だからできること

昨年の年商は約1千万円。でも、今年は2千万円を越しそうだ。彼らは、今年の1日における目標売上を8万5千円と決めた。それで年間を通してれば年間で3千万円になる。これまでその目標を実現しているが、夏場には売上が下がり、今期中に3千万円を実現するのは無理だ。

その日商を実現するために営業に出る美穂子が情報を集め、彼女の責任で商品と出荷の場を確保するように指示している。

現在、彼らは冬場のハウスでミズナやナス、ピーマン、ニンジン、タマネギ、ナスなどを特別栽培レベルで生産し、生協に出荷している。オーリジナルな商品開発にも取り組む。たとえば、のらぼう菜という埼玉の

品種を自家採取して9月に播いて葉とて「カキナ」と呼んで売っている。

経験のない作物の商品開発に関しては、美穂子が実験栽培をし、直売所で試し売りをする。それを開拓者であればこそ、将来の地域農業の姿を考え、次に続く者への準備も考える。受け継ぐだけの者の多くが、そこにある農地や農業の意味も問わず、その価値も気付かないのに。

敏夫たちの農業は、その技術も経営もまだまだ未熟であるかもしれない。でも、新規就農者であればこそのこれまでの農業、農村にこだわらない新しく広く視野を持ち、遠くを見つめることができる。今彼らが困難だと思つてることも、やがて彼らにとって容易なことになる。

やり続けることで未来が築かれていくのだ。耕し続ける勇気を持ち続けることだ。だからここに至るまでにこの10年が必要だったのだ。だが、彼らにはさらに豊かで意味ある未来が待つてゐるはずだ。

（本文中敬称略）